



さかたにぐるわ
岡崎城跡坂谷曲輪発掘調査 現地説明会資料 (R6. 3. 10)

岡崎市教育委員会社会教育課

【調査経緯】 岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画—平成 28 年度改訂版—」(H29.3)に基づき、岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めています。この調査研究の一環として、今回岡崎城跡坂谷曲輪の発掘調査を実施しました。

【坂谷曲輪の概要】 坂谷曲輪は右の図1のように、岡崎城の本丸と二の丸の西側、水堀を隔てて白山曲輪の東側に位置します。

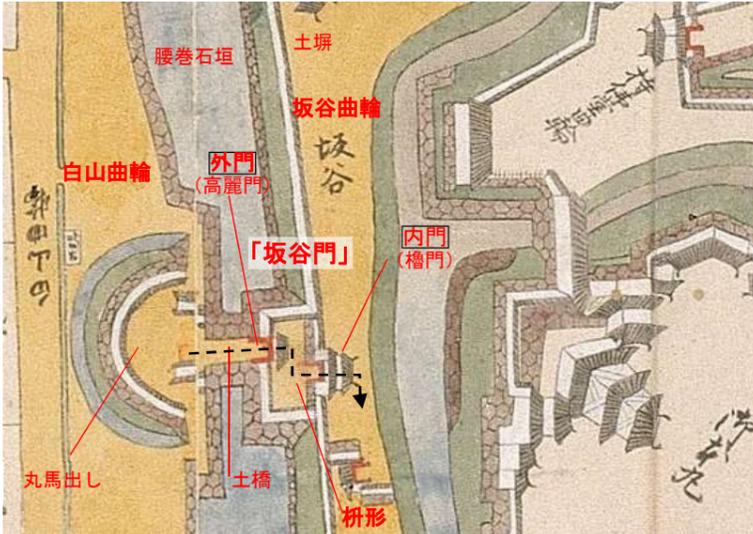


図2 水野家時代(1645~1762年)の岡崎城絵図から抜粋

絵図にはこの坂谷曲輪の中央部に2重の門が描かれています。これが今回の発掘調査の対象となる「坂谷門」です。この門は、関ヶ原の戦いの後、1601年から城主となった本多家の本多康重が、西の豊臣氏に対して睨みを利かせる防衛拠点として築造し始めたものと考えられます。そのため、本多家の初期の頃の絵図にはこの門も馬出しも描かれていません。

坂谷門は坂谷曲輪と白山曲輪をつなぐ部分に2つの門を配置し、それらを塀や石垣でつなぐことで、四角形の空間を作り出しています。この四角い形状を枅形と言ひ、「坂谷門」とはこの枅形全体を指します。

坂谷門の西側の門は本丸から遠いため、外門と呼びます。対して本丸に近い方の門は内門と呼びます。絵図によれば、外門は柱の上に屋根が乗るシンプルな構造をしていることが分かります。この門は右の写真のよう



参考写真 仕切門(高松城)

うに門の後ろ側に倒れないための控柱と、雨から扉を保護する屋根を持つ門、高麗門と想定されます。外門を抜けた先、枅形の奥に控えるのは内門です。内門は門の両側に約2.3mの石垣があり、その上に櫓が乗っていました。これを櫓門と言ひます。櫓には窓が設けられており、守る側はそこから弓矢で攻撃すること



図1 岡崎城郭図と調査地点

西暦	城主(城代)	できごと
1350		1351(建徳2) 仁木義長、三河守護(守護代、西郷氏) 1399(応永6) 乙川付替工事 1429-41(永享年間) 西郷氏、明大寺に屋敷を築造
1450	西郷氏 岡崎松平氏	1452(享徳1)-86(康正1) 岡崎城築城 1469-86(文明年間) 岡崎松平家成立
1500	松平清康 (松平信孝) 松平広忠 今川氏城代	1530(享禄3) 清康、本拠を岡崎城に移す 1535(天文4) 清康死去(森山崩れ)、松平信孝入城 1537(天文6) 広忠、岡崎城復帰 1542(天文11) 家康誕生 1549(天文18) 広忠死去
1550	松平元康(家康) 松平信康	1558-70(永禄年間) 「権現様御縄張之由」 桶狭間の戦い 1561(永禄4) 元康、織田氏と結ぶ 1563(永禄6) 三河一向一揆起こる 1570(元禄1) 家康、本拠を浜松城へ移す 1578(天正6) 岡崎城改修、家臣の「岡崎在郷」
	石川数正	1584(天正12) 小牧・長久手の戦い 1585(天正13) 石川数正、豊臣方へ出奔、岡崎城改修 1586(天正14) 家康、秀吉の臣下となる
	本多重次	
	田中吉政	1590(天正18) 家康、関東移封 1594(文禄3) 矢作川築堤 1598(慶長3) 矢作橋(土橋)工事開始、1901年頃完成 1600(慶長5) 関ヶ原の戦い 同年 吉政、筑後へ転封
1800	本多氏	1601(慶長6) 本多康重、入封(本多氏4代【前本多家】) 1602(慶長7) 城東の馬出し 1607(慶長12) 矢作川洪水 1613(慶長16) 大森寺郭堀 1613(慶長16) 二の丸御殿建造 1617(元和3) 天守再建 1621(元和7) 白山曲輪、東西城門、総土塀等 1623(元和9) 二の丸御殿建造 1634(寛永11) 矢作橋(板橋)完成(以後、9回架け替え) 1644(正保1) 菅生川堀石垣、西郷手門、西馬出し 1645(正保2) 水野忠善、入封(水野氏7代) 1654(承応3) 籠田総門、松葉総門(改修) 1670(寛文10) 御馳走屋敷を移転(上着町から) 1707(宝永4) 宝永地震による被害 1762(宝暦12) 松平康福、入封
1850	本多氏	1769(明和6) 本多忠康、入封(本多氏8代【後本多家】) 1783(天明3) 2箇所(東曲輪等)の石垣修補の許可 1785(天明5) 4箇所(備前曲輪等)の石垣修補 1837(天保8) 3箇所(隠居曲輪等)の石垣修補 1863(文久3) 7箇所(隠居曲輪等)の石垣修補 1866(慶應2) 5箇所(備前曲輪等)の石垣修補 1869(明治2) 本多忠直、岡崎藩知事 1871(明治4) 旧二の丸に頼田薬師設置 1873(明治6) 廣城令
1900	明治時代	1873-74 天守等解体
1950	大正時代 昭和時代	(明治6-7) 1959(昭和34) 復興天守完成

表1 岡崎城関連年表

ができます。このように、坂谷門は実に堅固かつ攻撃的な構造を有していたと考えられます。

【調査目的とトレンチ配置】 令和2年にも坂谷門の一部を調査しました。その際に、外門の鏡柱と控柱の礎石がそれぞれ1石、内門の礎石2石などが確認されています。これにより、およそその門の構造が想定できたため、今回はこの時の成果を踏まえて計画されました。

今回は枅形の構造解明を目的としています。例えば、前回の調査区からは外れていた外門と内門の礎石の発見や、現在は地中に埋もれて全く地面から見えていない内門の石垣の発見などです。

【発掘調査の主な成果】 調査の成果については、令和2年に発見されたものも合わせた解説になります。

《外門》

- ・門を構成する鏡柱の礎石1石、南北の控柱の礎石2石が確認された
- ・礎石には柱材を支えるためのホゾ穴が開いている(裏面写真1・2)
- ・礎石には柱当たりが薄っすら見えており、その大きさから柱材は鏡柱が30cm×50cmの長方形、控柱が1辺25cmの正方形となる
- ・控柱の後ろには踏み石(石段)がある=枅形の地面は外門の地面より一段高くなる

《内門》

- ・礎石が8石確認された。枅形の内側に5石、外側に3石
- ・礎石の数から、内門の西側部分は通用口となる主要な扉とは別に、潜戸がつけられていたものと想定される
- ・礎石にはホゾ穴は見られないが、柱当たりは薄っすら見える。その内1石には鉄さびと考えられる茶色い筋が残っている(写真8)
- ・門の南北両脇に石垣と栗石が確認された。北側の石垣は2石のみ確認されており、大部分が失われてしまっている(写真5)。南側の石垣は木の根により破壊されている部分もあるが、部分的に残っている(写真6)

《その他》

- ・内門から外門にかけて石材を組んで作られた幅約30cmの石組み側溝が確認された
- ・石組み側溝は外門と内門の下あたりでは蓋がかけられており、門から入った内部には蓋がかけられていない
- ・外門の北側の石垣には階段が付いていた
- ・門の南側の土堤と考えられる斜面が確認された(写真6)
- ・内門の下やその周辺は地面に瓦や石が大量に埋め込まれて整地されている。埋められた瓦には沢瀉文の軒丸瓦や小菊瓦が見られる(写真9、説明会の展示品にありますので是非ご覧ください)

・枅形全体の基礎構造がおおむね把握できた

【今後の課題】

- ・外門側の南側の石垣へ上がる階段、北側の土堤、門の内側(本丸側)の構造、側溝の行き先など

～語句解説～

城郭：ジョウカク。城自体や、城と曲輪の総称
 遺構：イコウ。掘立柱建物や堀などの構造物
 曲輪：クルワ、〜グルワ。天守のある空間を中心に、城の内部を石垣や堀、塀などで仕切った区画
 馬出し：ウマダシ。敵の足止めのために城や曲輪を出た正面に造られる小型の空間。堀や土塀で区画される攻撃的防衛拠点
 鏡柱：カガミバシラ。主柱、男柱とも言う
 控柱：ヒカエバシラ。門の転倒防止のため鏡柱の後ろに立てる柱
 礎石：ソセキ。建物の柱の下に置く石。平らなものは礎板とも。木材が地面から水分を受けて根腐れすることを防ぐ
 高麗門：コウライモン。鏡柱2本を立ててその上に横木を渡し、鏡柱の間に2枚の扉を吊った形。さらに転倒防止の控え柱を立て、鏡柱との間を棒状の木材でつなぐ
 櫓門：ヤグラモン。石垣と石垣の間を渡すように門扉を建て、石垣の上に櫓を渡す形式

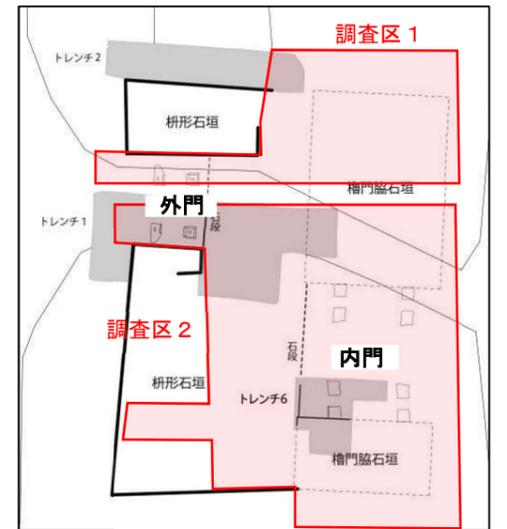


図3 調査区配置図

※グレーの部分がR2調査範囲



写真1 外門正面写真(西から撮影)

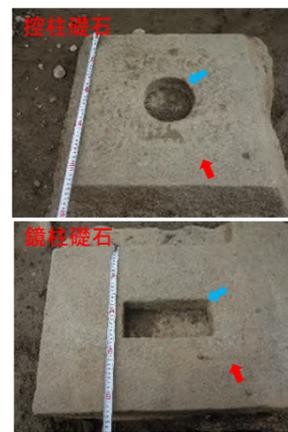


写真2 礎石ホゾ穴(→)
・柱当たり(→)

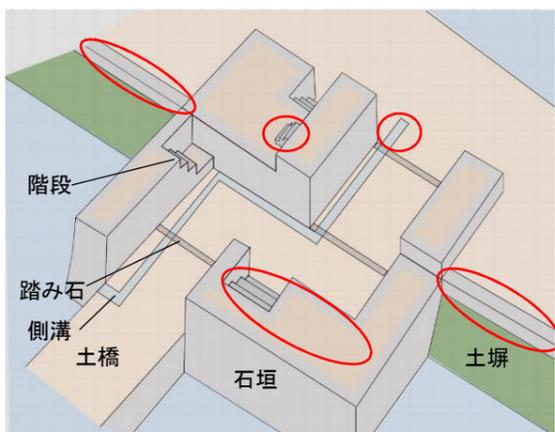


写真3 石組み側溝(東から)

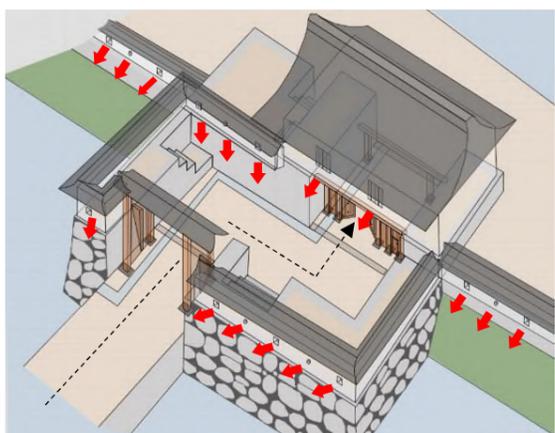


写真4 (奥)外門脇の階段と(手前)内門石垣の栗石(南東から)

《調査から見てきた坂谷門のイメージ》



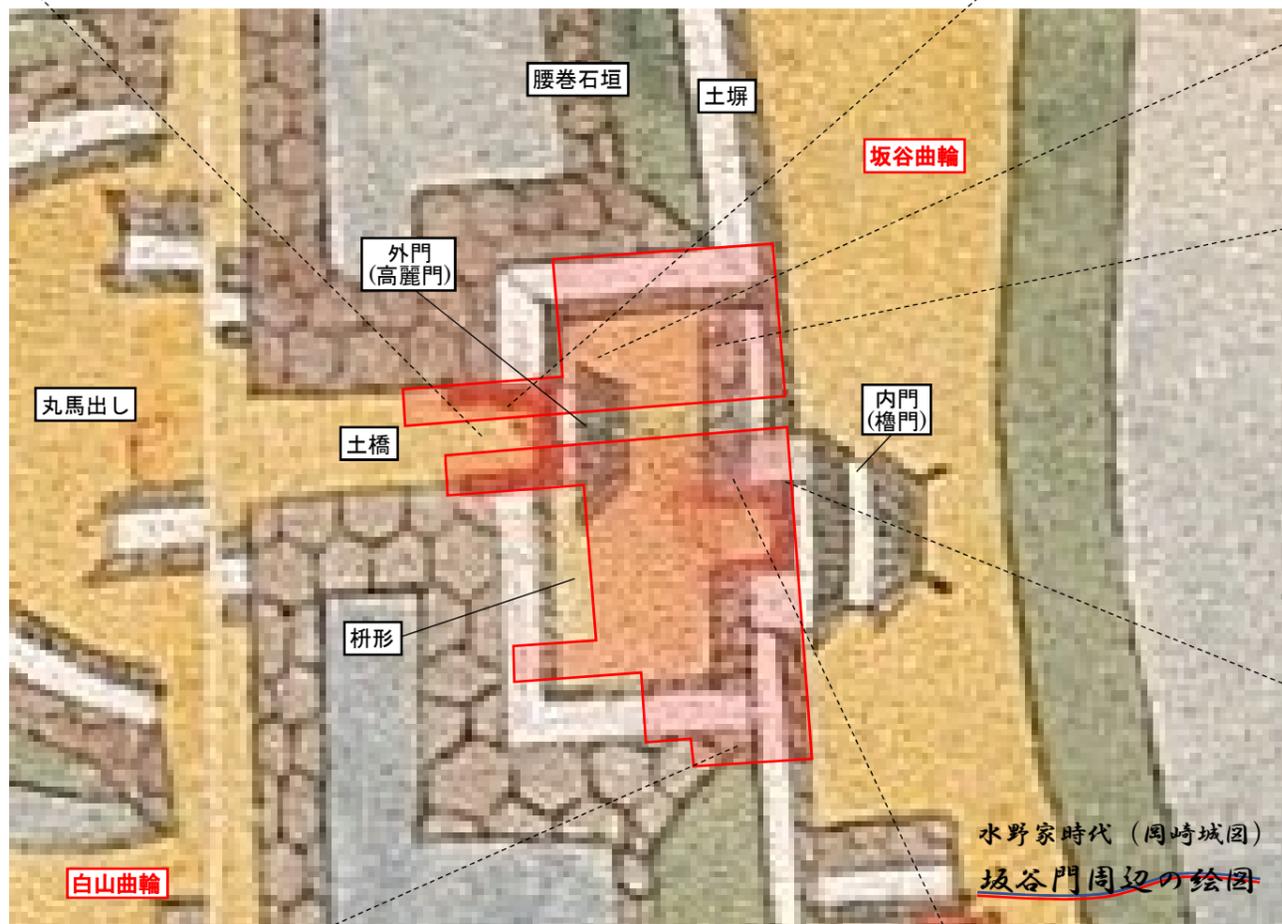
坂谷門 基礎部想定配置図 (○は未確定)



榎形構造想定図1 (→は矢掛かりのイメージ)



榎形構造想定図2



水野家時代(岡崎城図)
坂谷門周辺の絵図



写真5 (左)外門脇の階段と(右)内門の石垣・栗石(南西から)



写真8 内門礎石(中央の柱当たり→にご注目!)



写真6 (手前)土塀と(中)内門南側の石垣・栗石(南から)



写真7 (手前)内門北側の栗石と(中)石組み側溝(北から)



写真9 沢瀉文軒丸(江戸時代中期・水野家)瓦出土状況